

2017年新春展
「紙で遊ぶ世界—折紙とおもちゃ絵—」の紹介 ②

2017年新春展「紙で遊ぶ世界—折紙とおもちゃ絵—」の内容について、前回は折紙について紹介した。今月はもう一つの紙のおもちゃ、おもちゃ絵を取り上げる。

「おもちゃ絵」とは耳慣れない言葉かもしれない。江戸時代までは、現在の「おもちゃ」に当たる用語が「持ちあそび」や「手遊び」であり、幕末から明治にかけて「お」を付けて省略した結果、「おもちゃ」に変化したと言われている。要するに子どもが遊ぶ絵で、その絵とは、あの広重や歌麿で有名な浮世絵版画とせばわかりやすいだろうか。おもちゃ絵とは近年研究者が付けた名称で、当時は「錦絵」と呼び習わされていたのだろう。西洋人から高い評価を得た美人画や風景画とは異なり、子どもが切り抜いて遊んだあとは捨てられる消耗品であったため、近年までは浮世絵版画のなかでも軽視されていた。しかし、ここに描かれているのは当時の最新風俗であり、消耗品だからこそ、時代の流行を映し出す鏡と言える。現代のグラビア雑誌と何らかわらない。

おもちゃ絵は、さらにいくつかのジャンルに分類することができる。区分は幾通りもあるが、展示では大きく4つに分けた。まず、様々な風俗の人物（女性が多い）と衣装や小物を配し、切り抜いて着せ替えて遊ぶ“着せ替え絵”。前面背面双方から描いて並列しているものもあり、貼り合わせたりもする。この場合、特に“両面絵”とも呼ぶ。また、歌舞伎役者の似顔絵とそれに付け替える役柄のかつらを並べた“かつら合わせ”も着せ替えの一種と言える。2つ目はあるテーマに添って集めたものを標本のように並べる“ものづくし絵”である。魚づくし、植木づくし、武者づくし等がそれで、これを拡大したものが集団授業に使用する掛図である。3つ目は、格子状に区切った枠に物語をワンシーンごとにはめこむ“物語こま絵”で、切り抜いて豆本に仕立てることができる。絵本も、江戸時代の庶民にとっては相当高価であったろうから、このような一枚物を買って求めて自分たちで本に仕立てた。18世紀の寛政以前は絵本の文化だが、19世紀以降子ども向けの大きな絵本は作られなくなる。色刷りで、値段も手頃なおもちゃ絵に絵本は押されてしまったのだ。最後が“組上絵”で、平面に刷られたものを立体的に組み立てるものである。上方では印刷物を「はんこ」(＝版行・板行)と呼ぶので、“立版古”(たてばんこ)とも称する。お盆の供養の燈籠が起源であるため、夏の風物詩でもあり、家の前に飾って灯を入れて納涼でそぞろ歩く人々の目を楽しませた。“切組燈籠絵”(きりくみとうろうえ)ともいうのはこのためである。歌舞伎の名舞台や名所建造物など素材は多様で、小は一枚物から大は十二枚組という子どもの手には負えない大がかりなものまであった。今回展示していないおもちゃ絵のジャンルとしては、絵や文字を並べて一つのを表現する、目で見るなどなぞ“判じ絵”や“双六”などもある。

展示資料から2点紹介したい。着せ替え絵はおもちゃ絵のなかでも親しみがあり、遊んだことがある女性も多いのではないだろうか。図1は明治末期に刷られた着せ替え絵で、少女が憧れるファッションが詰め込まれている。キーワードは“ハンドバッグ”“パラソル”“行燈袴”“おさげ髪”である。“ハンドバツ



図1 おもちゃ絵「教育少女きせかえ」 図2 おもちゃ絵「妹背山吉野川の場組上」
絵師未詳 大判一枚 明治43年(1910) 歌川国秀 大判一枚 明治27年(1894)

グ”は明治になってからの持ち物で、江戸時代は男女ともに手先で袋物を持ち歩かず多くは懐中に仕舞っていた。男性は煙草入れなどを腰に下げたが、女性は袂に入れることで袂の跳ね上がりを防いだりもした。そのせいか、明治の外出時の必需品はハンドバッグよりも日除けの“パラソル”が先んじた。学校で体操という科目が始まると女子は走る際に裾の乱れを気遣わねばならず、脱ぎ着しやすいスカート状になった袴が考案された。これが“行燈袴”で、明治30年以降広く普及した。“おさげ髪”は前髪を額で切りそろえ、後ろは一つに束ねて大きなりボンで結ぶ髪型で、女学生の間で流行する。このような最新アイテムを持っていなくても、これで遊ぶことで少女たちは疑似体験を楽しめたにちがいない。図2は組上絵で、これで妹背山女庭訓(いもせやまおんなていきん) 吉野川の間を作り上げる。題材は有名な時代狂言で、元は明和8年(1771)1月に大坂の竹本座で初演された人形浄瑠璃だが、大人気の演目となり、歌舞伎でも早速同年8月に大坂中の芝居で初演された。吉野川を挟んだ妹山、背山に館を構える二つの家は領地争いから長年に渡って仲違いをしているが、両家の息子と娘は愛し合うようになる。結局二人は結ばれず、娘は母の手にかかって果て、息子は忠義のために自刃してしまう。その後両家のわだかまりは解け、娘の首は3月3日に雛道具と共に吉野川を渡って亡くなった息子の元へ嫁ぐ。明治27年3月10日初日の歌舞伎座で、この組上絵に描かれた通りの配役で実際に上演された。おもちゃ絵は役者のプロマイドでもあり、遊べるフライヤーでもあったのである。

江戸から明治にかけての最新流行や風俗を映し出すおもちゃ絵を会場でご覧いただき、時代の息吹を感じていただきたい。



展示風景